

げんでん ふれあい 福井

2014 WINTER 第46号



第24回 福井県高等学校総合文化祭

ちいきのぶんかかつどう ～財団助成事業の紹介～

ふるさと福井
人物シリーズ 「酒井小浜藩初代藩主・江戸幕府大老

酒井 忠勝(四)」

樹氷のブナ林

文／増永 迪男

筆者プロフィール



増永 迪男
Michio Masunaga

昭和8年福井市生まれ。山岳エッセイスト。「霧の谷」、「風景との出会い」、「夜明けの霧の山」などを出版。福井の山々や風景を表現したエッセイは、多くの県民に親しまれている。平成12年福井県文化賞受賞。平成19年度げんでんふるさと文化賞受賞。

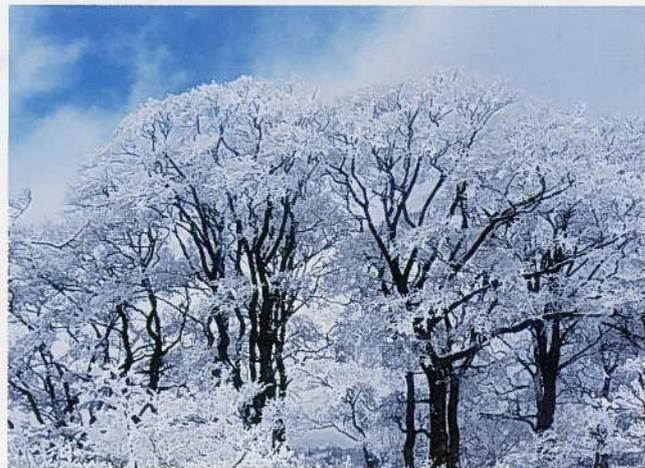
真冬になると、夜叉ヶ池はどのような姿になっているのかになって、独りで二回登ってみた。そのほかに仲間とでは三回。というところで、真冬の夜叉ヶ池について、少しは話せるのではないかと思っ

冬の夜叉ヶ池は遠くなる。道の除雪はないから雪道6+の歩きが必要になる。かんじきを履くと2時間あまり。

初めて登った時は雪に埋もれた山道にきて、これはこれとびつくりさせられた。谷沿いの道は雪崩のあとの、つるつるの急斜面に変わっている。そこで、それならばと尾根を登った。弱い冬型のお天気がだった。低い雲が流れてきて山を隠していく。尾根の雪はさらさらでかんじきから粉雪が散る。まわりは真冬の静かな山、独りで山の中に来ているという気分が濃くなってくる。この気持ちはなにもにも変えがたい。

尾根ではブナとミズナラが目立っていた。葉を落としている木々とおして、雪の山の景色が広がっている。登るにつれて雲に隠れている山の奥から、風の音が聞こえるようになった。

風が運ぶ霧の中で、尾根の木々は真っ白になっていた。氷の霧で生まれた世界。霧の中で見当をつけ、尾根を横切るようにして池の



夜叉ヶ池ブナ林

ある鞍部に出る。そこは白い平原だった。雪を巻きあげて風が走る。

弱い冬型のお天気だから、雲の切れ間がくる。同時に霧は流れて、つかの間の青空が現れる。樹氷に飾られたブナ林が浮き立つ瞬間だった。

このような雪の山でも、生き物の気配は常にある。夜叉ヶ池から、雪に残るキツネの足跡と連れ添って、三周ヶ岳まで歩いたこともあった。

木炭や薪が家庭のエネルギー源だった時代が終わって、約50年が過ぎた。今、福井の奥山でブナの林が復活しているように見えてきたのは、以前の炭の原木地に、新しい森が育っているからだろう。まるで植えられたように見える青年期の林も多くなった。ブナはブナだけの森を作る。

福井の大きな川の源の山々で、ブナの森が復活しているのを見ると、嬉しいことに思えるが、生活の場での木材の必要性を考えると、やはり、世界のどこかで森は伐られているのだから。その木はパルプとなり木材となって海を渡っていく。それでは今、地球の森は復活しているのだろうか。

目次 46

- 巻頭エッセイ
「樹氷のブナ林」…………… 2
- 第24回福井県高等学校総合文化祭…………… 3
- ちいきのぶんかかどう
～財団助成事業の紹介～…………… 4～5
- ふるさと福井人物シリーズ
「酒井小浜藩初代藩主
・江戸幕府大老
酒井 忠勝(四)」…………… 6～7
- ふくい伝統行事シリーズ
「音海のお的射り」…………… 8
- 若狭の食彩(一)
「正月と食」…………… 9
- 敦賀市立博物館
誌上ギャラリー／40…………… 10
- 情報ファイル…………… 11

表紙の説明

高浜町音海では、毎年元日の午前中に気比神社の長床と境内で、「お的射り」と総称した正月神事が厳かに行われます。「お的射り」と呼ばれる、生業の豊産を祈り災厄をはらう弓打ちの行事の歩射と、豊作を祈念する御田植祭が習合した年頭の行事で、平成18年に福井県無形民俗文化財に指定されています。村中の戸主が長床に集合し、祝(ホウリ)役の5名が中心になって今年もめでたい初春の神聖な行事が滞りなく行われました。



財団シンボルマーク



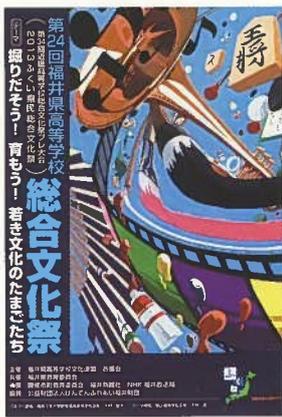
公益財団法人「げんでんふれあい福井財団」は、福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的に、県民のみなさんととの絆を大切に広報誌を目指します。

第24回 福井県高等学校総合文化祭

「掘りだそう！育もう！若き文化のたまごたち」

第24回福井県高等学校総合文化祭（公財）げんでんふれあい福井財団協賛）が昨年6月から県下各地で開催されました。テーマは「掘りだそう！育もう！若き文化のたまごたち」。11月に本県で開催される第34回近畿高等学校総合文化祭のプレ大会と位置づけ、同大会の成功に向けた生徒たちの意気込みが感じられる文化祭になりました。

音楽、演劇、美術・工芸など24の部門で開催。今回は総合開会式の模様などを紹介します。



総合文化祭のポスター

総合開会式

第34回近畿高等学校総合文化祭プレ総合開会式を兼ねて、去る10月26日、福井県立音楽堂大ホールで開催。各部門の垣根を越えて合同デモンストレーションを行うなど、見どころ満載で力を入った開会式となりました。

第一部の式典では、合唱、吹奏楽、郷土芸能、演劇など18の部会の代表が

入場、来年の近畿大会に向けての抱負や準備状況を発表。生徒実行委員長の浅井美樹さん（北陸高2年）が「来年の近畿大会を心待ちにしている。大会成功の第一歩にしたい。」とあいさつしました。



各部会代表の入場

第二部のデモンストレーションでは、「福井記憶博物館へようこそ」と題し、三方五湖の年縞が形成され始めた頃から恐竜の時代、奈良、平安、戦国、江戸の時代へと、福井県の歴史や近畿とのつながりを演劇、郷土芸能、合唱、日本音楽、吟詠剣詩舞、吹奏楽、ダンスの演技、演奏で表現。楽しい構成と登場した生徒たちの生き生きとした表情に、若者のパワー、頼もしさが伝わってきました。



勝山高校、福井農林高校、北陸高校による郷土芸能「恐竜行進曲」

美術・工芸、書道、写真展 特別支援学校作品展

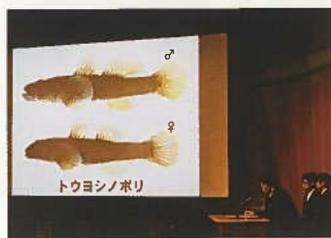
10月3日から7日まで、福井県立美術館で開催。県内43校から感性豊かな若者の意欲が伝わる力作、880点が展覧されました。



書道部門の展示

が研究成果や日ごろの活動内容を発表しました。

福井農林高校環境土木部は、「耳石を利用したトウヨシノボリ」の研究成果を発表。県内5地点で採取したトウヨシノボリの耳石に含まれる微量元素を分析し、海へ回遊しているもの、汽水域までしか回遊していないものの3パターンが存在することを解明。「採集、分析など一年半をかけて試料作りに苦労したが、研究成果が出た時はこれまでの努力が報われたことを実感、うれしかった。」と報告しました。



福井農林高校の発表

三竹直樹審査委員長（丹南高校教頭）は、「どのクラブも長い時間をかけて実験・調査を行っており、研究中に生じた疑問に正面からぶつかってきた様子がよくわかった。」と講評。審査結果は次のとおりです。

○最優秀賞
丸岡高校科学・情報部物理班B
「チヨークの点線の研究」

○優秀賞
福井農林高校環境土木部
「耳石を利用したトウヨシノボリの回遊履歴の解明」
鯖江高校生物クラブ

「スカシカシパンの潜行と起き上がり行動に関するすかし孔の役割」

第61回福井県高等学校理科クラブ研修会・研究発表会

10月29日に若狭湾エネルギーセンターで開催。7校、10の理科クラブ

ちいまのぶんかかつどう

財団助成事業の紹介

当財団では毎年、県内の文化団体等の事業活動に助成を行っています。今年度の助成事業の中から3つの事業を紹介します。

さばえ近松文学賞2013

〈恋話 (KOIBANA)〉

第1回さばえ近松文学賞 (公財)

げんでんふれあい福井財団後援)の表彰式が10月5日、鯖江市立待公民館で行われました。最優秀賞の近松賞には徳山容子さん(甲府市)の「恋の手本」が選ばれ、主催者である近松の里づくり事業推進会議の増永初美会長から表彰状が授与されました。

江戸時代の人形浄瑠璃作家近松門左衛門は幼少期を鯖江市で過ごしたことから、市では「近松の里づくり」として史跡や観光拠点の整備を行ってきました。昨年、近松生誕360周年を記念して立待地区が中心となって恋愛短編小説の「さばえ近松文学賞」を創設、全国から556点もの応募がありました。

表彰式では、増永会長が「たくさんのお誘いがあり、大きな反響にうれしく思う。この力を継続的なものにしていきたい。」と、来賓の牧野百男鯖江市長も「近松が鯖江に定着してきた。歴史・文化を生かし、ふるさとに自信と誇りを持つまちづくりさらにさらに取り組む。」とあいさつしました。

このほか「立待観月の夕べ」や「第16回たちまち近松まつり」の開催、「FLAMENCO 曽根崎心中」の

公演など近松生誕360周年を記念して多彩なイベントが繰り広げられました。地区住民が熱心に取り組んできたまちづくりの花が大きく咲きました。



受賞者と牧野市長、増永会長(中央)

〈近松門左衛門〉

1653〜1724。井原西鶴、松尾芭蕉とともに元禄三大文豪。「東洋のシエクスピア」とも呼ばれ、「心中天網島」、「曽根崎心中」などの悲しさや愚かさ、やさしさを描いた人形浄瑠璃や歌舞伎の優れた作品を数多く残しました。

〈近松と鯖江〉

近松の父は福井藩の藩士で、福井藩より二万五千石を分知され吉江藩主となった松平昌親の付き人として、近松2歳の時に吉江(現在の鯖江市吉江町)に移ってきました。物心ついたこ

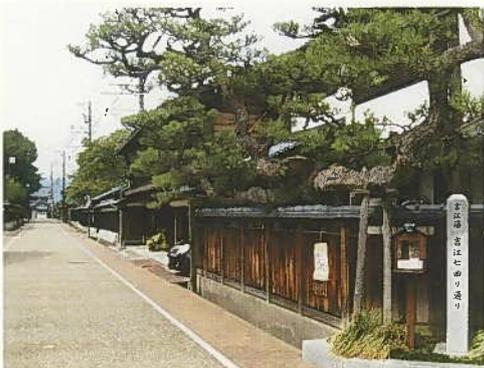
ろから多感な少年時代までの人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしました。



吉江町の近松門左衛門像

〈近松の里たちまち〉

吉江藩の城下町の面影が残る「吉江七曲り通り」や近松が一角を借り住んでいたといわれる「春慶寺」など近松ゆかりの歴史と自然があふれる里。散策コースが整備されています。時を超えて人を元気にする近松のパワーに触れてみてください。



昔の面影が残る吉江七曲り通り

第二回アベサンショウウオ ネットワーク会議 in 越前

総理大臣のような名前ですが、その名のとおりサンショウウオの一種。「阿部さん」という学者の名前からつけられたそうです。大きさは約10cm、背中は暗褐色。福井県、京都府、兵庫県、石川県の一部地域にしか生息せず、越前市西部地域には日本の80%が生息。竹やぶや雑木林にある湧水、溝などにいます。近年、生息地の荒廃等により激減、環境省の絶滅危惧ⅠA類(ごく近い将来に絶滅する危険あり)に分類されています。「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(略称「種の保存法」)が平成25年7月に改正され、アベサンショウウオを殺傷、捕獲、譲渡すると五百万円以下の罰金等が科せられます。



アベサンショウウオ (長谷川巖氏提供)

12月7日、8日に越前市で第二回アベサンショウウオネットワーク会議in越前(公財)げんでんふれあい福井

財団協賛)が開かれました。全国の関係自治体、市民、NPO、研究者が一同に会し、保全対策の協議と研鑽を深めるものです。

初日は、松井京都大学大学院教授、加藤環境省野生生物専門官による講演の後、石川県、福井県、京都府、兵庫県からの代表から保全活動の現状の報告と意見交換が行われました。

本県からは福井県両生爬虫類研究会会長の長谷川巖氏が報告。坂井、丹生、嶺南東部で生息が確認されているが、廃棄物の不法投棄や工事などで生息地が荒廃、イノシシの被害も大きいこと、地域のボランティアによる生息地の保全活動では、高齢化による人手不足が課題などと報告。小学校でビオトープを整備するなど、子どものころから関心を持っていくことが重要と訴えました。生息地保全の方策や生息地を明らかにすることのメリット・デメリットなど、各府県が抱える課題について熱心に意見交換。二日目は、越前市白山地



第二回アペサンショウウオネットワーク会議 in 越前

区で保全整備地の現地研修が行われました。

自然環境を守ることの難しさとそれに取り組む人達の苦勞、熱意が伝わってきました。

壬生狂言美浜公演

美浜町で京都・壬生寺の壬生狂言が上演されます(公財)げんでんふれあい福井財団協賛)。

平安末期の武将源三位頼政は、「平家物語」の中で「鶴(ぬえ) 退治」をしたという有名な話が語られています。美浜町河原市地区では、区内にある水生寺に頼政の位牌が祀られていることから、この伝承を後世に語り継ぐ事業に取り組んでいます。この活動の一環として、国の重要無形民俗文化財「壬生狂言 ぬえ(鶴)」の美浜招致を企画し、実現の運びとなりました。

〈源頼政と若狭〉

平氏打倒の兵を挙げた源頼政は小浜市の宮川地区を知行していたとされ、大谷には屋敷跡と伝わる地があります。その娘で二条天皇に仕えた二条院讃岐は、同市田鳥に居を構えていたと伝わり、若狭を歌った百人一首で有名な和歌「わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の人こそ知らね 乾く間もなし」で知られています。



源頼政と猪早太の鶴退治

〈鶴退治〉

猿の顔、狸の胴体、虎の手足、蛇の尾を持った鶴(ぬえ)が京都の御所に現れ天皇を悩ました。退治を命ぜられた頼政は、見事、弓矢で射、仕留めたとされ、その矢は小浜市大谷の産といわれています。

〈壬生狂言〉

鎌倉時代に、円覚上人が群集の前に無言劇で仏の教えを説こうと始めたもの。近世に入り庶民大衆の娯楽として発展、宗教劇だけでなく能や物語からも取り入れ、現在上演されるものは30曲。毎年、春、秋、節分の3回、京都の壬生寺で上演されています。

河原市まちづくり実行委員会代表の久我伸孝さんにお聞きしました。

●水生寺と源頼政の関係は

水生寺には本尊として秘仏十一面観世音菩薩が祀られています。この観音様は頼政が北国の逆徒鎮圧の途次に当

地の水中で見つけ、吉事と喜び七堂伽藍を建てて祀ったと言われています。寺には頼政の位牌が祀られており、毎年5月には頼政忌を営んでいます。観音様の御開帳は33年に一度で、今年の5月4日、5日に行います。頼政の娘二条院讃岐が小浜市田鳥の永源寺に祀られていることから、位牌を持ち寄って八百年ぶりの父娘対面も予定しています。

●壬生狂言招致の経緯は

河原市地区では、頼政との縁を広くみなさんに知っていただくため、生涯学習講座や講演会を開催してきました。壬生狂言には頼政の鶴退治の演目があることから、観音様の御開帳に合わせて、美浜町制60周年の記念行事として招聘することになりました。

●公演は

2月23日(日) 午後1時から美浜町生涯学習センター「なびあす」で上演します。演目は、「鶴(ぬえ)」と「大原女」、入場料は千円(当日券の販売はありません)です。国の重要無形民俗文化財である素朴な芸能を是非お楽しみください。

「お問い合わせ」

☎0770-315050 秀栄寺

公演ポスター

酒井忠勝 (四)

文／中島辰男

筆者プロフィール



中島 辰男
Tatuo Nakajima

《筆者略歴》

昭和 3 年 小浜市生
 昭和19年 県立小浜中学より
 陸軍予科士官学校
 入学
 昭和20年 敗戦により同校
 解散、帰郷

福井県連合青年団長、内外海
 郵便局長、小浜市内外海公民
 館長、福井県教育委員長、福井
 県立若狭歴史民俗資料館長な
 などを歴任。
 「福井県の誕生—近代の越前と
 若狭—」「若越に想う」「若狭路
 往還」などの著作多数

家光への殉死と側近忠勝

前述のように、家光は死に臨んで忠勝一人を呼び、殉死を固く戒めて禁じ、幼少の家綱を補佐するよう命じたが、家光に近侍の忠勝の娘阿久里の夫、老中の下総佐倉城主堀田正盛や、同じ老中の武蔵岩槻城主安部重次、御側出頭の内田正信が家光死の当日20日、家光を追って殉死し、翌21日や23日にも殉死が続いた。このことがあってから寛文年間以降、幕府は殉死を禁じている。

『日本の近世』（高木昭作著）によると、家光の死後10余年ごろ、著者不明の『玉滴陰見』という書物に家光に殉死しなかった側近を非難した落首・落書がのっている。殉死しなかった知恵伊豆と言われた松平信綱を筆頭に槍玉に挙げ、名指しで家光在任中の平和な時代に出世した重臣達の度胸のなさを非難しているのだ。

「大猷院様（家光の法号）」遺言にて松平伊豆守信綱殉死無りケレハ、弱臣院殿前捨遺豆州大守殉死斟酌大居士伊豆マメ八豆府ニシテハヨケレトモ、



酒井忠勝像（小浜市役所前）

ヤクニタタヌハ切スナリケリ」などと非難する6人の重臣の名が上がっている。

慶安4年の落書に、家光に殉死した3人から忠勝等殉死しなかった老中にあてた奉書がつくられている。つまり、あの世の家光の意を伝達するような文書である。「急度（きつと）飛札をもつて申し達し候、大猷院様ご機嫌残る所なく、極楽世界に着御され候間、心安かるべく候、されば、御先に相越し候柳生但馬守一人、御前を去らずこれありといえども、かの者ばかりではご不自由に申し召され候間、そこもとに相残り候御譜代の内にも、取り分け日ごろお心安く召し使われ候中根吉岐守、永井日向守をさし越すべき候。右

の外、朽木民武少輔等四人は、勝手次第に片時も急ぎ罷り越し候よう、申し渡さるべく候。はたまたそこもとにおいて、吉利支丹の御詮議におんなずみ遊ばされ候間、井上筑後守儀、早々弘誓早船（ぐぜいの早ふね、念仏の天竺笠和讃に「帰命頂来天竺の天の河原の川上に 弘誓の舟が磯につく舟は白金櫓は黄金…」）をもつて渡海せしむべくの旨、上意に候。恐々謹言。差出人は先に殉死した大居士の3人名で、宛て名は酒井忠勝、松平信綱、安部忠秋の3老中になっている。この落書は、この時代、將軍の側近親衛隊（今でいう御学友か）であった者は死んで將軍に仕えるべきとの庶民感情が、殉死しなかった家光の側近を名指しで非難したのである。

しかし、この落書には側近中の側近、忠勝をあの世の家光のところに送れとはいわずに、生きて他の側近をあの世の家光の元へ送るようにと書いている。幕府における忠勝の役割を一般の庶民も薄々感じていたのであろうか。『玉滴陰見』に載せられている庶民の落書は、当時の幕政における忠勝の重要な役割を示唆している。



小浜漁港から見た後瀬山

高次と忠勝 珍しい水城の小浜城

中世は山城の時代であった。人々は攻め手に対して山城を拠点に待も百姓も籠城して戦い、自分の土地を守ったのである。全国に中世の山城は数万を下らないという。小浜で有名な万葉集に詠われている後瀬山の山城（標高168メートル）は、その城郭を今に残し、国の史跡に指定されている。若狭を支配した若狭武田氏5代元光が大永2（1522）年、丹後街道沿いの後瀬山に山城を築いた。天正10（1582）年8代元明は明智光秀に荷担したとして、秀吉により近江海津で自害させられた。

以後、秀吉の家臣丹羽、浅野、木下が城主となり、京極高次の若狭入りまで約80年間の城であった。



後瀨山城址



戦争の中世から平和の近世へとといわれるが、秀吉の天下統一、家康の元和偃武へ。全国で数万という山城の「廃止令」への流れは、秀吉令から家康令へと継承された。事実として多くの山城はその役割を終えていく。後瀨の山城もこのようにして、関ヶ原の合戦で東軍につき、大津で西軍を引きとめた功績によって小浜入りした京極高次によって廃城。領国支配の要として、新たに北川、南川、多田川、江古川の4つの川が小浜湾に注ぐ三角州「切所」(防衛に適した要害。ここに住む下竹原の漁民を西津浜に移した。)に、珍

しい海岸城(水城)を造り始めたのが慶長6(1601)年である。(同じ頃築城の長州毛利藩の萩城が偲ばれる。)

市の生んだ子の三姉妹の次女であるお初(常高院)の夫であった高次は、城主9年にして小浜で死去、嫡子忠高(正室は家光の姉)が引き継いだ。大坂冬・夏の陣への参陣や江戸城・大坂城普請など幕府への奉公多く、小浜の築城は進まなかった。中世、侍や百姓が狭い山城によって戦っていることから、近世の城は平地でより多くの領民をも武士と共に籠城(会津の鶴ヶ岡城の例)して戦うための広さが必要であった。3百年近く徳川氏の居城であった今日の皇居の広さを考えると頷けるものがある。こうして小浜城も本丸・二の丸・三の丸・北の丸・西の丸と多門5、埋門2、櫓25と、その面積は外堀を除き1万9千坪、東西284メートル、南北264メートルの規模であった。したがって、忠高移封の寛永11年になってもなお城は完成していなかった。

そこへ忠勝の入国となる。入国と同時に幕府の許可を得て城の四方の石垣を1間高く積み上げ、天守閣の造営に取りかかる。棟梁は徳川幕府お抱えの中井正純に依頼し、大工は京都から、石工は近江の穴生衆を呼び寄せた。こうして寛永13(1636)年の秋10月に、江戸城の富士見櫓を模したという天守閣が完成し、忠勝も就国して竣工式典が営まれている。しかし、多間丸など全てが完成したのは正保2(1645)年と実に44年を要している。もっとも、砂上の楼閣ならぬ砂上の城郭、土台固めに要した石や土は莫大

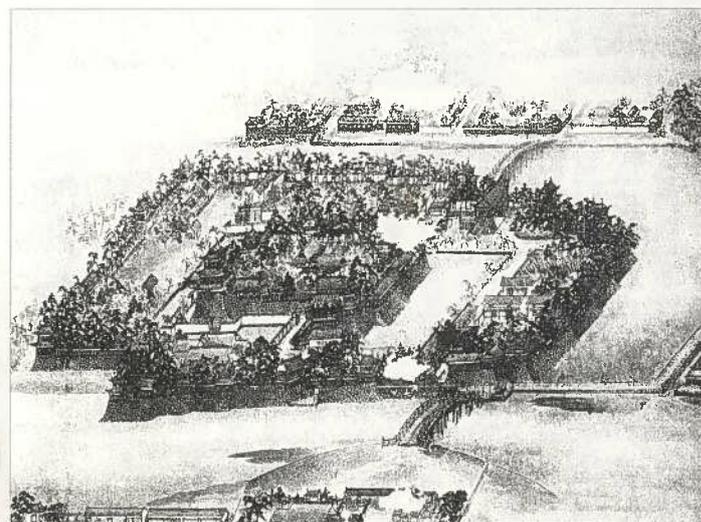
で多大の労働力を要した事は想像に難くない。こうしたなか、天守台高さ11メートル、総高29メートル、最上層(3間×4間)、中層(5間×6間)、下層(7間×8間)の天守閣が完成した(「わかさ小浜の文化財」)。

さて、このように完成した天守閣はどのように使用されていたのだろうか。忠勝書状によると家老の外には秘匿せよとして常時1万両(今日の10億円か)を蓄えさせている。「金子二千両づつを箱詰め、釘打ち、薄い筵に包み、縄をかけ、小判二千両入りと札を書さし候て、入申可候。鉄砲十挺、弓十張、鍵十筋、長刀五振、具足十領わさと二重目へ入置可申候。右銀子入候儀、人存候様に諸家中之者へかくし候て入置可申候事。」と微に入り、細にわたる指示を家老に出している。こう見ると、忠勝の天守閣の活用は武器庫に見せかけて

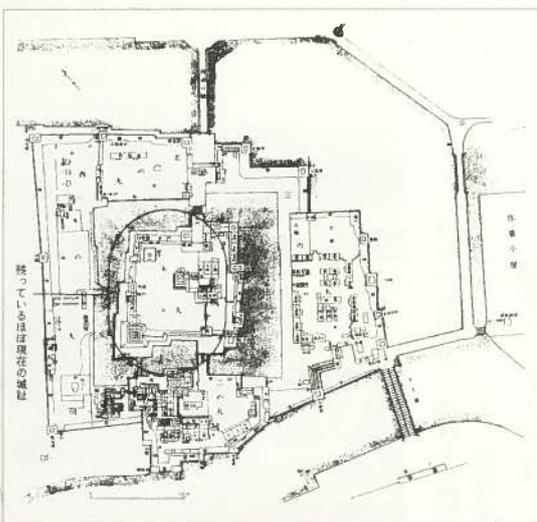
金庫として使用していたというべきか。こうして水城の小浜城は、日本海に沈む美しい夕日に映えて230年、若狭4郡のシンボルとして青戸入江に聳えただのである。



小浜城址



小浜城絵図 江戸時代 酒井家文庫
〔「酒井忠勝にみる近世大名の姿」川越市立博物館〕



安政一慶応頃の小浜城絵図
(小浜神社所蔵)

ふくいの
伝統行事福井県指定無形民俗文化財
おとみ
「音海のお的射り」

高浜町

音海の成立ち

急峻な音海断崖で知られる高浜町音海は、戸数7戸の内浦半島西岸の先端にある漁村。関西電力高浜原子力発電所のトンネルを越えると、内浦湾の入江に面して細長く集落が密集し、村の中ほどの山麓にタブノキや椎の古木に覆われるように、氏神の気比神社が鎮座しています。祭神は仲哀天皇・神功皇后・応神天皇の三柱の神で、敦賀の漁師が漂着して当村を開いたと伝えられてきました。

発電所がある字田ノ浦にもかつて集落があり、田畑が作られていました。純漁村と言っている現在の狭隘な村の景観からは考えられませんが、以前稲作が行われていたことがお的射りの神事を見ればよくわかります。

お的射りの儀の準備

お的射りは毎年1月元日の午前中に、祝と呼ばれる禰宜2名（カミノネギ・シモノネギ）と、次年度の候補3名のゴンノカミの計5名の村役が中心になって執り行われています。他にも初御講・御祈念・秋葉御講・例祭・二夜待ち・お的返還式などの重要な神事を受け持つ名譽ある宮役で、かつては1年間塩垢離をとり朝詣りを欠かさ



ないなどの嚴重な物忌みが求められていました。任期は5年、1年ごとに1名が退任し、次の役と交替することになっています。

宮役は早朝から長床に詰めて準備をし、ゴマタキの役2名が瑞垣の下で、胡麻がらと粟がらに火をつけて昨年のお的を燃やして甘酒を注ぎ、的を描く墨汁を作ります。長床では杉の木の薄い粉板を十文字に編んで縄で縛り、墨汁で黒々と二重丸を描いて新しいお的を作成します。

長床の神事

まず長床の神事に先立ち、2名の禰宜さんの新年の挨拶があり、ついでカミノネギからゴンノカミへ、シモノネギからカミノネギへと無事に本殿と毘沙門堂の鍵渡しが行われます。その

後、若い衆が拝殿から稲に見立てた三束のサカシバ（神柴）をさも重そうに運び込むと、カミノネギがゴンノカミの前でサカシバの根元を向け、3回足を踏みならし、左から跨いで「八升」、次いで右回りに「八升、八升」、

株をゴンノカミへ向けて「一斗八升」と豊作を祝います。右回りの西から回るのは雨が西天から降ること、一束三六本の柴を一

〇八本用意するのは煩惱の数を意味するとされてきました。白米を柴に撒き、1つまみ配

られた白米をゴンノカミはサカシバに結わえて拝礼。足を踏み鳴らすのは雷鳴を、サカシバを配り甘酒を振りかけるのは、「甘」が「雨」に通じ、水田に欠かせない降雨を意味するとされ、かつては紋付が汚れるほど景気よく振り撒いたと言わ



れています。その後、「四海波」の謡い初めがあり、いよいよ「お的射り」の初弓が社殿脇で引かれます。

初弓を引く

石清水八幡から受けてきた2本の矢をつがえて、カミノネギとゴンノカミが順番に、天地・東西南北の方向を射る所作をし、的を射ますが、的中すると不幸になるとされ、わざと的を外します。ゴマタキがお的を十文字に折りたたんで縄で縛り、新カミノネギとなるゴンノカミが御神体とされるお的を胸に抱きかかえて、先立ちが甘酒を道中ふりまきながら村中へと行進。本屋の台所側の波風板の下にこもりに包んで打ち付け、1年間大事に守り、次年に引き継がれます。実に見事な演出だと思いませんか。

お的を吊す風習は、古くは「信貴山縁起」や「一遍聖絵」「粉河寺縁起」にも見え、当地の奥ゆかしい神事は中世以来の伝統を今に伝える貴重な民俗であることがわかります。



若狭の食彩(一)

正月と食

今、ユネスコの無形文化遺産の登録により、「和食」への関心が高まっています。食の宝庫である、こゝ若狭(嶺南)地方には、全国や世界に誇れる食文化が数多くあります。

若狭の雑煮

地域や家によって違いはありますが、一般的に東日本では角餅にすまし、近畿では丸餅に味噌仕立て、それより西は、丸餅にすまし汁仕立てが多く見られます。福井県下では、丸餅に味噌仕立てで、カブ、花鰹など、シンプルな雑煮が多いようです。

若狭地方でも、味噌仕立てに丸餅だけのシンプルな雑煮が多く、小浜市やおおい町などで食べられています。また、小浜市の一部の地域では、丸餅に味噌仕立てに黒(白)砂糖をのせた甘い雑煮です。これは、かつて砂糖が貴重だった時代には、正月ぐらいいはということでも、贅沢品であった砂糖を用いたようです。また、北前船で、砂糖や黒砂糖が運ばれていたことも影響しているようです。このほか、若狭町や美浜町新庄でも丸餅に味噌仕立て、かしら芋、大根を入れ、上に黒砂糖をのせた雑煮が食べられています。

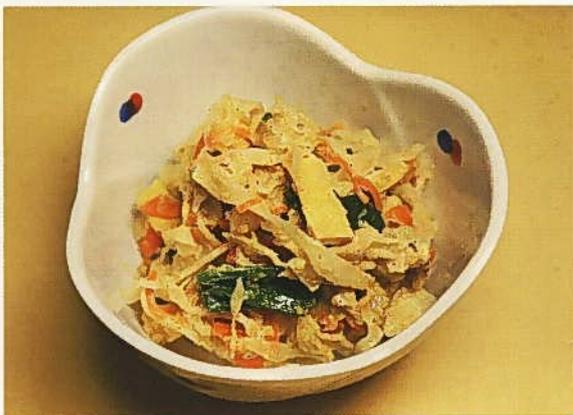
こっばなます

「こっばなます」は、敦賀湾の東に面した敦賀市挙野・五幡の2地区に伝わる正月料理です。挙野区の方にうかがったところ、こっばとは、大工道具のカンナで木くずのように薄く大根を削って作ることから付いた名前ではないかと思うと、教えて頂きました。

現在でも挙野区では、正月や伊勢講などで食べられています。正月は「祝いなます」と言って、大根、人参、アゲ、ネギ、ゴマなどで作ります。作り方の最大のポイントは、大根を



小浜市の雑煮 (御食国若狭おばま食文化館提供)



こっばなます (筆者調理)

薄く削ることで、現在はスライサー(ベンリナー)を使います。手の指がつるくらい、薄く削らないと、出来上がった時の大根のシャキシャキの食感が出ないので、この作業が最も大変です。次に、この大根と人参を絞ります。が、美味しく作るためには、指の間からポタポタと水が出なくなるまで、かたく絞ることが、2つ目のポイントです。3つ目のポイントは、煎りゴマを油が出るまでよく搗ることです。搗ったゴマに、溶き辛子、味噌、砂糖、酢を混ぜ合わせて調味料を作ります。そして、カリッとあぶったアゲ、サツと湯通しをしたネギ、かたく絞った大根と人参を混ぜ、先ほどの調味料を、よく混ぜ合わせると完成です。実際、作ってみると、大変手間がかかる料理ですが、味は格別です。シャキシャキの歯ごたえに、ゴマの風味に辛子がきいたどこか懐かしい味がします。手間がかかりますが、食べる人の顔を思い浮かべて愛情を込めて、作られるそうです。

れんぼ

「れんぼ」は、小浜市の東端に位置する宮川地区で、正月などに食べられています。大根とコンニャクを醤油や砂糖、みりんなどで炊き、味が付いてから最後に唐辛子と素炒りのごまめを混ぜ合せて作ります。ごまめの香ばしい風味が、食欲をそそる一品です。



れんぼ (御食国若狭おばま食文化館提供)

今は豊かになり、ご馳走だと思ったり正月の過ごし方も変化していますが、一年のはじめに、こうした昔からの手作りのご馳走は良いものです。

(御食国若狭おばま食文化館)

学芸員 一矢典子



蜂猿図 一幅 森 祖仙筆

本図は、蜂の巣を囲んで遊ぶ五匹の猿の姿を、それぞれ個性豊かにかつ自然に描き出しています。

左手前の猿は、不用意に刺されたものが右足をひっこめ、奇声をあげているようです。対してその奥の一匹は、哲学的とも感じられる表情で、手につまんだ蜂をじっと観察しているかのようです。右奥の二匹は母子でしょうが、子猿は蜂、あるいは奇声に驚いて母猿に取りすがり、母猿は興味ありげに皆を振り返っています。そして手前に寝そべる一匹は手も足も組んで動じたふうもなく、いかにものんびりとくつろいでいるようです。それぞれの表情は緻密な筆使いで明確に描き分けられており、全体に微笑まじさをたたえながらも、その巧みさゆえにあるいは人間社会の風刺でも込められているのかと想像したくなります。

猿たちの毛並みはふわふわした手触りが想像できる程の質感で、手足の写実的な表現などもあわせて、まるで生きた猿を観

察している様です。これは刷毛によって毛並みを描き、要所に細筆で毛並みを描き加えるという祖仙独自の表現で、作者の観察眼や技量だけでなく、猿画に対する情熱を感じさせます。

作者の森祖仙は名を守家、号は祖仙、後に柴野栗山の勧めで狙仙と改め、外に如寒齋、靈明菴などがあります。長崎、一説に大坂の出身とも言われ、大坂に住んで狩野派の山本如春齋に学びますが、円山・四條派等も研鑽したと考えられます。猿の生態を研究するため、三年間山にこもって猿と生活したといい、祖仙独自の優れた猿画を多く描いた事で知られています。文政四年（一八二一）七月、七十五歳で没しています。

- 絹本着色
- 縦43.0cm 横73.0cm
- 江戸時代中～後期
- 落款 祖仙
- 印章 「杜守家」 白文方印
「祖仙」朱文円印

（敦賀市立博物館 学芸員 高早恵美）

本誌へのご意見・ご要望

第45号(平成25年8月発行)の
ご愛読者アンケートから

ふくい風花随筆文学賞

・大変感動した。どの作品も思いが強く伝わってきた。

酒井忠勝

・とても歴史の勉強になる。続けてほしい。

全般

- ・県内の生活の歴史・文化がよく理解できて楽しい。
- ・歴史・民俗・伝統行事の記事が豊富で読み応えがある。
- ・嶺南の歴史・民俗だけでなく、福井県全体のことが知りたい。
- ・民俗文化、伝統行事等の情報をたくさん載せてください。
- ・各地の伝統料理、旬のものを使った料理など教えてください。

貴重なご意見、ご要望ありがとうございました。これからの誌面づくりに生かしていきます。地域文化の振興を図るため、今後とも、福井県の歴史、民俗、伝統行事、芸術、文化などの情報を幅広くお届けしたいと思います。ご支援、ご協力をお願いします。



古道近江坂

文化講演会「ダウン症の子と共に生きて」

講師 金澤泰子さん(書家)

講演概要

平成25年7月7日(日) 県生活学習館において、福井県連合婦人会と共催で文化講演会を開催しました。県下の婦人会・女性の会会員ら約500名が参加。ダウン症の子を持つ書家・金澤さんの母としての思い、苦しみなど、その生き様のお話に感動しました。

・42歳で翔子を高齢出産。妊娠はことのほかうれしかった。しかし、出産50日目にダウン症を告知、絶望、ノイローゼ気味に。一緒に死のうとまで思ったが翔子が救ってくれた。
・苦しみは、翔子が私の思った子でなかったこと、健康な子が欲しかった。希望がないと思ひ込んだ。奇跡でダウン症を治してほしいと思った。

・普通学級の小学校では何をしてもビリ。しかし、翔子がいるクラスはおだやかになった。神はこの世に不用なものを作らない。近所の子と書道を始めたが、翔子は格別うまかった。ゆりかごの中から私の書を見ていたからだろう。

・みんなが翔子の書を見て涙を流す。それは魂の純粋度が高いから。世俗に染まらなかった、学歴社会に入らなかった、試験を受けなかった。競争心がない、欲望がない、無心。人に喜んでもらいたい、愛情の深い子に育った。私がカリカリすると「お母さんが笑えば相手も笑う。」と言った。
・比べなければ障害ではない。翔子自身は不幸だとは思っていない、まわりがそう思っているだけ。



講演の金澤さん

・翔子は書道で活躍、ビリが日本一になった。出産時には絶望感を味わったが、今は日本一幸せ普通の子だったらこんな幸せになれなかった。
・生きてさえいれば絶望はない。闇の中に光がある。
・貴重なお話ありがとうございました。

編集後記

● 今号から巻頭エッセイのコーナーを設けました。山岳エッセイストとして活躍しておられる増永迪男氏に初回を飾っていただきました。お礼申し上げます。

● 新しく「若狭の食彩」シリーズを始めました。和食が世界無形文化遺産に登録。福井県にも豊富な食文化があります。御食国若狭おばま食文化館学芸員の一矢典子氏に、主に若狭の食文化を解説していただきます。ご期待ください。

● 若狭町の三十三間山。京都の三十三間堂の棟木が切り出されたことからこの名がついたそうです。滋賀県高島市(今津)から県境の尾根を伝ってこの山の麓、若狭町成願寺の閻見神社に通じる古道「近江坂」があります。山がかつて今津の古刹「酒波寺」の所領で、多くの人馬が往来した道だそうです。「鯖街道」をはじめとして、こうした険しい山道や峠を通り、多くの人々が交流し、育まれてきた若狭地方の伝統文化。歴史の「重さ」を感じずにはおれません。

● 次号は7月に発刊の予定です。楽しんで読んでいただける内容にしたいと思います。ご意見をお聞かせください。

平成26年度 財団助成事業の募集について

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づき助成をしています。平成26年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

- 1 福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2 構成員（会員）が原則として20名以上の団体
- 3 平成26年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
- 4 営利を目的とせず、明確な会計処理を実施、報告できる団体
- 5 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成26年4月20日（日）まで（申請事業の実施が4月～6月の場合は、3月20日（木）まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等があります。詳しいことは「げんでんふれあい福井財団（☎0770-21-0291）」にお問合せください。

財団イベント INFORMATION

| イベント名 | 内 容 | 期 日 | 場 所 | 入場料・その他 |
|----------------------|--------------------------------------|-----------------------------|-------------------|--|
| 文化講演会 | <講師> 金田一 秀穂氏 <演題> 「心地よい日本語」 | 平成26年 2月9日(日) 午後1時～ | 小浜市文化会館 | 小浜市連合婦人会と 財団の共催 入場無料 |
| ふたりのピアノ・ デュオコンサート | 今川 裕代 大谷 研人 | 平成26年 3月9日(日) 午後3時～ | 若狭町 パレア若狭音楽ホール | パレア若狭主催 財団協賛 (全席指定) 一般1,500円 学生 500円 |
| 平成25年度 福井県新人演奏会 | 公開オーディション | 平成26年 2月16日(日) 午前11時～ | 福井県立音楽堂小ホール | 福井県文化振興事業団主催 財団協賛 <公開オーディション> 入場無料 |
| | 新人演奏会 | 平成26年 3月23日(日) 午後1時～ | | <新人演奏会> 全席自由 500円 |